

【登場人物】

夕霧：…扇で夕陽をさえぎる
落葉の宮：…部屋の中の白い
着物

【場面解説】

親友の柏木の遺言を守り、柏木の亡き後、何かと気に掛けていた柏木の妻・落葉の宮(女三宮の姉)に、夕霧は次第に心惹かれていきます。落葉の宮の母の一条御息所が体調を崩し、母子で移り住んでいた小野の里に、お世話をするといた代わった宮への想いを切々と打ち明けますが、宮は受け入れようとしません。思いがけない誤解が重なり、一条御息所は心労で亡くなってしまいます。葬儀などまめまめしく手伝った後、再び小野の里を訪れる夕霧。秋の夕日を眩しそうに扇をかざして光をさえぎる夕霧の様子は、女房たちが「ため息が出るほど美しい」と思うほどでした。夕霧の切ない想いを現すかのように妻を恋いて鳴くという、夫婦の鹿が描かれています。

詞書は、一条御息所の生前に小野の里を訪れた際のものですが、巻名ともなった「夕霧」が詠まれ、秋深い山里の風景と共に、より情緒を醸し出しているようです。



【詞書】ことばがき 扇面に書かれている文字

山さとの

あはれを そふる夕霧に

たらいでむ空も

なき心して

(夕霧から落葉の宮への和歌)

【現代語訳】

夕霧が立ち込めて一層山里あわれさを添えるにつけても、立ち帰ることも出来ないような気がいたします。